

7. 川原寺および周辺地の調査

川原寺周辺では、3ヶ所で調査を行なったが、ここではそのうち、北方建物を再確認したA調査地と、橋寺寺域に近接するB調査地とについて概要を報告する。

A. 北方建物の調査

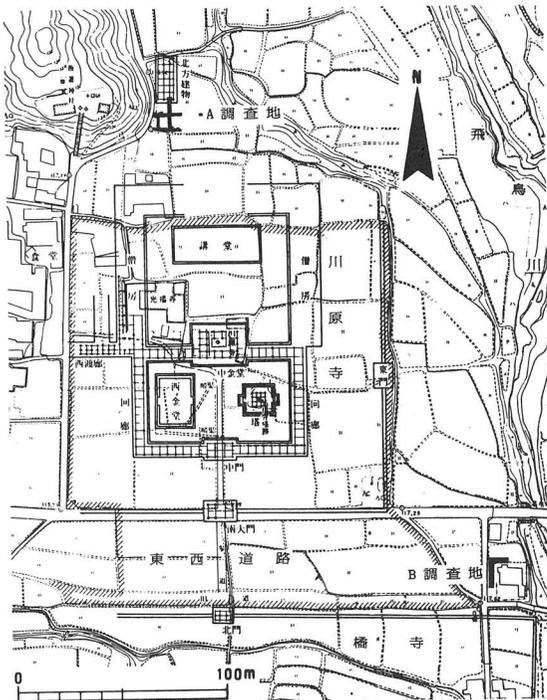
(昭和57年3月)

本調査地は板蓋神社のある丘（川原寺裏山）の東に接した水田で、講堂跡の北西方にあたり、当研究所が昭和33年に行なった川原寺第3次調査で「北方建物」と呼んだ礎石建物が確認されているところである。今回、所有者から暗渠工事の申請が出されたために敷設予定位置について小規模な調査を実施したものである。

この「北方建物」は水田の西端にあって、残存する17個の礎石と北側の農道拡張時に動かされた2個の礎石から梁行3間（東から6.5尺、9尺、9尺）、桁行6間（11尺等間）の東側に庇を持つ南北棟で、建物の東側には玉石による基壇縁が認められている。また、本建物の南側には柱筋の揃う2個の礎石があって、東西建物の

一部と考えられていた。調査は、暗渠が両建物の間に設けられる計画であったことから両者の関係を明らかにするために、東西及び南北方向の小トレンチを設けて行なった。この結果、南側の2個の礎石は北方建物と一連の基壇面にあること、基壇東辺で認められている基壇縁と同様の玉石列が南端礎石の南側で検出されたことなどから、両者が別個の建物ではなく、同一の建物であることが明らかとなった。

遺構 北方建物（SB01）に属するものとして礎石3、礎石据付穴1、

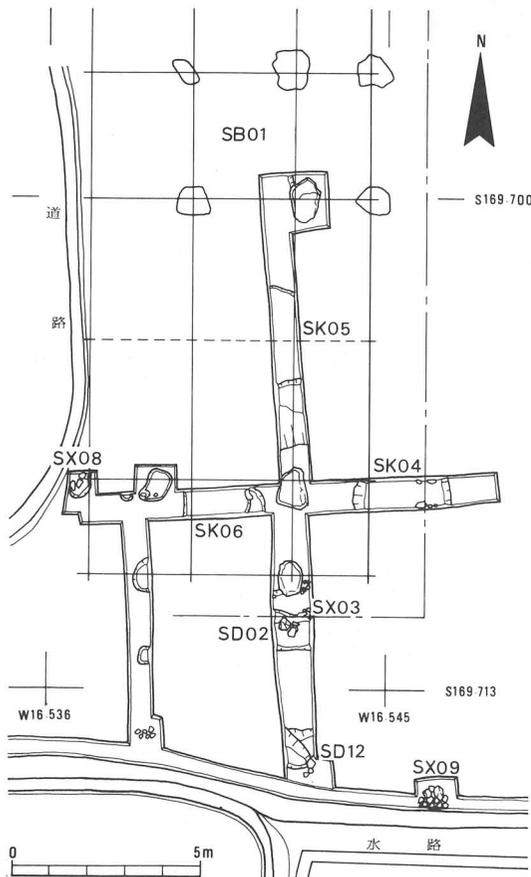


第22図 川原寺周辺調査位置図

基壇縁玉石列，雨落溝があり，その他に根石，土壇，遊離した礎石2などがある。

3個の礎石は，いずれも第3次調査で確認されているものであり，上面が平坦な花崗岩の自然石で，間隔は北からほぼ7.5 m，2.5 mである。各礎石は，黄色砂質土と黄褐色粘質土の互層からなる厚さ0.3 mの基壇築成土中に据えられている。なお，基壇築成土は西側では次第に薄くなり，西端の礎石据付穴SX08は地山面に直接掘り込んでいる。玉石列SX03は，人頭大の河原石を東西に並べたもので，礎石から1.1 mの位置にある。雨落溝SD02は幅0.9 m，深さ0.2 mで溝内には多量の瓦が堆積していた。なお，玉石列と雨落溝は西側のトレンチには及んでおらず，このことから建物の正面にあたる東半部にのみつくられたとみられる。

基壇上面の土壇SK05は炭化物を含む皿状の土壇で，礎石推定位置には抜取痕跡等は確認できなかった。根石SX09はSB01の南東，畦畔際にあつて，河原石10余



第23図 A調査地遺構配置図(1:200)

個を円形に並べたもので，その帰属等は不明である。昭和47～49年の整備工事の際に南側の水路下より東西方向の礎石列がみつかり，それと関連するものかもしれない。また，遊離した礎石は調査水田の東南隅の土壇から出土したもので，いずれも0.75 mの方形柱座を持ち，回廊及び僧房の礎石と近似している。

遺物 基壇周辺から出土した軒瓦は川原寺創建時の軒丸瓦4点，奈良から平安後期に至る軒丸瓦8点，軒平瓦11点であり，面戸瓦1点がある。また，基壇上面から埴1点が出土している。

まとめ 以上のように，今回の調査によって「北方建物」は南へ3間分延びて桁行9間であることが確かめられたわけであるが，南側から2間目と3間目につ

いては、11尺の等間割りとはならず、各12.5尺とするかあるいは11尺、14尺の不等間を考えなければならない。本調査は緊急的なものであり、隣接の礎石確認にまで及ばなかった点で、再度の全体的調査が必要と思われる。

B. 川原寺東南方の調査

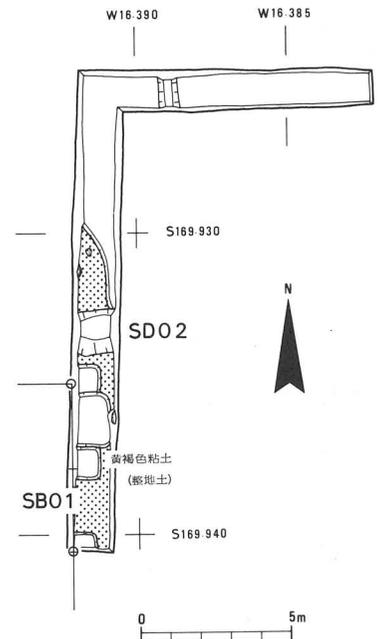
(昭和57年7月)

調査地は川原寺中金堂の東南170 mにある民家の敷地内で、調査地の東には飛鳥川が深い谷をなして北流している。昭和32年の調査で、川原寺南門とその南20 mの位置で橋寺北門・北築地が検出され、二つの門にはさまれた南北幅40 mの部分は、東西道路であると考えられている。調査地はその東西道路上に位置し、橋寺の東北隅に近接している。調査地の層序は、上から表土・灰褐色土・茶褐色砂質土・黄褐色粘土・茶褐色粘土・青灰色粘土・灰色砂礫層であり、遺構は黄褐色粘土層上面で東西溝・掘立柱建物などを検出した。灰色砂礫層は、飛鳥川の旧河川敷にあたり、黄褐色粘土層から青灰色粘土層までは、7世紀前半代の遺物を含む整地土である。黄褐色粘土層は南半に広がっており北半には薄いバラス層がみられる。

掘立柱建物SB01は南北2間分の柱列を検出したにとどまり棟の方向は決め難い。柱掘形は一辺1.2 mと大型の方形で深さは80 cmである。北と南の柱穴には直径30 cmの柱根が遺存した。柱間は2.8 m等間に復原できる。埋土から7世紀前半代の土器が少量出土した。

東西溝SD02はSB01の北約2 mにあり、幅1.7 m、深さ40 cmである。埋土には多数の人頭大玉石とともに川原寺出土例と類似した平瓦片が含まれており、埋没が川原寺創建以後であることを示している。

今回検出したSB01は、想定東西道路敷上でかつ、橋寺北築地に近接した位置にあり、7世紀前半代以後に造営された大型柱掘形と柱根をもつ建物であり、川原寺・橋寺・東西道路との関係は位置・年代ともに微妙である。しかし、調査は小規模であり、建物の全容も明らかでない現状では、その性格を含めて説明を今後の調査の進展にゆだねたい。



第24図 B調査地遺構配置図(1:250)